○カヽヤンバラ補正（久内清孝）

余は本誌 13（1937）p. 853 にカヽヤンバラが三重縣下に產するを報じ，京大の某氏が之を採りに行つたと聞いた。其後故白井光太郎博士の園藝植物の由來（本草學論攷第三册收錄）を見るに及び，本品は既に文政年間に八丈の船が呂宋に漂流し，同地より持歸り，漂流記念に呂宋の地名カヽヤンを和名として與えた由，馬場仲達の草木譜に詳記しあり，また，飯室樂圃の草花譜にも其栽培の經過が記され，本草圖譜にも圖說しあることを知つた。勿論，これと，余が既報せしものと關係はないにしても，このバラは，日本本來のフロラに入らないものと思はれる。

○アブラガヤの語源（前川文夫）

牧野先生は圖鑑：812 で「花穗油色を帶び且つ油臭あれば云ふ」とされた。油といふものが植物の名の上にどう關係して居るかは過去に使はれた油の種類と土地の相違とによつて違つて來るであらう。現在のやうな種々な用途は別としても食用油と燈用油とでは物も違つて來るし，柳田國男氏が火の昔に說かれた樣に菜種油とは別に全國的に廣く使用された燈油としてヒヤウビ卽ちイヌガヤの實の油があつたとすれば，その色や臭なども存外關係があつたかも知れない。しかし油の種類は違つても，油が木とか紙とかに浸み込んだあとの印象は大體どの油にも共通でしかも油らしい特徵の一つである。上記のアブラガヤの桿の節ではその上下 2 cm 位の間に濃い茶褐色の着色があつて穗の成熟期には殊に著るしく，その光澤，上下端のぼかし加減など油がにじんだのをふいたあとの感じがよく出て居る。穗の色と共にこんなことも命名への根據を與へたかも知れぬと思ふ。この色澤は腊葉では色褪せて注意を惹かなくなる。

○ヤマブキショウマの食用（前川文夫）

昭和 20 年の初夏宮城縣の川渡溫泉の近くに數日居たことがあつた。時恰も食糧の苦しい頃であつて，蔬菜として代用して居るものに注意をはらつたが，澤山にある東北地方一般の代用野菜の中で，珍らしいと思つたのはヤマブキショウマであつた。あの附近はクリ帶の疎林と原野であるが，思ひの外にこの種が澤山に茂つて居て中々とりきれるものではなかつた。土地ではイハダラといひ，嫩い莖をひたし物や汁の實にして食べるが，一寸獨特の味があつて，質量共にいけるものであつた。山形縣北村山郡鄉土植物誌にもユハダラ，イハダラとあり，又蘭山の啓蒙山草之部には升麻の下にトリアシショウマやイヌショウマと混ぜて名前だけがイハダラ(越後)，イハンタイラ(佐渡)とあげてあるだけで說明もないが，この方言は羽越方面に廣いものなのであろう。それにしても有名な米澤藩の救荒書〃かてもの〃には全然出て來ないのは食用にする習慣はきはめて新らしいものか又は他地方からの導入であらうか，川渡では混生するアカショウマは黃褐の毛があるのに，イハダラは全く裸なので子供でもよく區別を知つて居た。